

## 生徒指導の新しい潮流

# 「日本のピア・サポート・プログラム」 と予防教育的生徒指導

国立教育政策研究所生徒指導研究センター

## 滝 充

本論に入る前にお断りしておきたい点がある。ここで予防教育的生徒指導の実践として紹介しているのは、横浜ピア・サポート研究会と国立教育政策研究所が開発した「日本のピア・サポート・プログラム」である。同じピア・サポートと称してはいても、(1)海外の実践（前提となる学校制度や文化が異なる）、(2)子どもに相談活動をさせる実践（本来、ピア・カウンセリングと呼ぶべき）等は、予防教育的生徒指導には当たらない。なお、各実践の違いについては、滝（2002a）を参照されたい。

### 1 予防教育的とは

「予防教育的」というのは、単に「予防的」という意味でも、教育相談等で用いられる「予防・開発的」という意味でもない。詳細は滝（2002b）をごらんいただきたいが、今の日本でなされている生徒指導にかかわる諸実践を整理するために筆者が提案した、理論的な概念である。

簡単に説明しておこう。生徒指導の諸実践を生徒指導の目的から整理すると、大きく4つに分類できる。そして、問題事象に対するそれらのアプローチに着目すると、「事後的―予防的」と「治療的―教育的」の2つの特徴的な軸が浮き彫りになる。そして、実際に存在する両者の組み合わせとしては、事後治療的、予防治療的、ここで取り上げる予防教育的、の3つが見いだせる。

事後的と予防的の違いについては、「問題が起きた後に、その問題に対処するために、当該児童生徒に即して、働きかけを行っていく」アプローチと、「問題が起きる前に、問題の発生を未然に防ぐ（発生しにくくする）ために、広く一般を対象に、働きかけを行っておく」アプローチとの違い、という説明で十分であろう。

次に、治療的と教育的の違いである。ここでいう治療的とは、「(被治療者の)問題の原因を(治療者が)特定し、その部分に対して働きかけることにより、問題を解消する」という、いわば「治療モデル」に依拠するアプローチを指す。それに対し、ここでいう教育的とは、「(被指導者の)問題を(被指導者が)自覚し、(自ら)対処する意欲をもつことにより、問題(課題)が解決(克服)される」という、いわば「教育モデル」に依拠するアプローチを指す。

この両者の差は、大人(治療者・指導者)中心の実践なのか、子ども(被治療者・被指導者)中心の実践なのか、という教育の根幹にかかわってくる。治療的アプローチでは、主導権はあくまで「治療者」にあり、何が問題なのか、それにどう対処していくかは「治療者」の見識にゆだねられている。「被治療者」はそれに同意し協力することはあっても、主導権を握ることはない。

それに対して、教育的アプローチでは主導権はあくまで「被指導者」にある。何が問題なのか、それにどう対処するのがよいのか等、「指導者」は助言・支援はでき

る。だが、「被指導者」がそれを進んで受け入れ努力しないかぎり、問題が解決したことにはならない。「指導者」が主導権を握って強制しても意味はないのである。誤解のないようつけ加えるが、単に子どもを前面に出せば子ども中心というわけではないし、生徒指導の実践が常に教育的でなければならぬわけではない。また、開発的と称するものも含め、カウンセリングは治療的アプローチであって、教育的アプローチにはなりえない。

## 2 予防教育的な視点に立つた生徒指導とは

このところの生徒指導は、事後的にしる予防的にしる治療的な姿勢に偏っている。まるで教育とは何か、子どもが育つとはどういうことか等を見失っているかのようである。子ども自身の育とうとする力、子ども同士の影響力、個々の教師の指導力ではなく学校としての教育力、地域や保護者の支え等を視野に入れられたなら、「自分の指導によって子どもを変えたい」という教師主導の治療的発想から解放され、もっと柔軟で幅広い対応ができていくはずなのに、と感じることも多い。

では、予防教育的生徒指導とはどういうものなのか。学習指導に例えるなら、子どもに知識や技能を学ばせようとするのでなく、どのようにしたら知識や技能が得られるのかという力を身につけさせる、という発想の転換をすることに相当する。その生徒指導版と考えてほしい。

私は、今の子どもの課題を「社会性の未熟・未発達」ととらえている。とりわけ、対人関係における側面が問題である。治療的発想に立つと、これを直接に補おう、直そう、と考えがちである。ところが、社会性や主体性、創造性といったものは、誰かが教え込むわけにはいかない。「ひきだしたり、高めたり」しようとするればするほど、実は逆効果であることに気づく必要がある。

「短時間で人間関係をつくる」と称する実践の多くは、単に集団内の親密性を高めているにすぎず、右に述べた意味での社会性を育てているわけではない。小学校でそうした実践を行っているでも中学校進学時点で不登校が増加する点などから、その限界は明らかである。教師主導の治療的取り組みは教師の影響力のもとで関係を成立させているだけで、子ども自身の力を育ててはいない。

教育的な視点に立てたなら、社会性の問題の解決とは、人とかかわることの楽しさや必要性を子ども自身が自分の体験を通して自覚していく、ということではかありえないことに気づく。ここでは、大人は直接に何かを指導できるわけではない。子ども自らが体験を通して気づくような「好ましい」場を設定し、一歩下がった位置から危険のないように見守り、必要に応じて支えるしかない。もちろん、こうした場が子どもにうまく作用するには大きなポイントがある。それは、共通の目標を理解した多くの人々（すべての教職員、そして保護者や地域の人々、子ども自身等）の協力を得ていくことである。すなわち、

ここで必要なのは、学級を超えた、学校づくり、地域づくり等の「広がり」の視点である。これは、学級づくりという狭い枠に引きこもり、カウンセリング等の技法を修得することにより、学級担任一人で子どもの関係性を高めたり、社会性を身につけさせたりしたい、という治療的発想の教育活動とは正反対のものである。

そもそも、対人関係に関していうなら、子どもにとって最良のモデルは、年長の子どもにほかならない。年長者が年少者の世話をし、年少者は年長者に感謝する。年長者はそのことにより自覚を高め、年少者はそれを見てお手本にする。昔ながらの子育てに見られる発達の「見通し」をもつことも、やはり重要なポイントである。

### 3 「日本のピア・サポート・プログラム」とは

詳細は、滝編著（2002）等を見ていただきたいが、「日本のピア・サポート・プログラム」とは、右に述べてきたような「広がり」や「見通し」のもとに、予防教育的な視点から、今の子どもとの対人関係の未熟・未発達の問題を解消しようとする実践である。「お世話をする活動（他の人の役に立つ体験）」を通して、お世話をする側の子どもたち全員に「自己有用感」を獲得させることを目的としており、すべての子どもが義務教育を修了するまでにそれを身につけられるよう、どのように「学校づくり」を進めていくかを示したプログラムであ

る。

小学校の場合なら、どの学校でも行っている異学年でふれあう活動のなかから、6年生が下の学年をお世話する機会を明確な形で設定できるものを取り上げ、彼らが「自己有用感」を獲得できる場として位置づける。すなわち、準備・計画と「ふりかえり」の時間を彼らに十分に保証するとともに、全教職員が彼らの活動を間接的に支えられるよう共通理解を図り、6年生が確実に「自己有用感」を獲得できるように学校づくりを行うのである。

中学校では、小中連携を基盤にして、小学校にお世話活動に出かけたり、入学説明会に出かけたりといった機会を利用すれば、小学校と同様、「自己有用感」を獲得させることが可能になる。地域との連携を基盤とした職業体験活動の機会を利用することも可能である。この場合にも、準備・計画と「ふりかえり」の時間の十分な保証と、全教職員の共通理解の2つは不可欠である。

ところで、「日本のピア・サポート・プログラム」では、お世話活動に入る前に、「領域1」と呼ばれる基礎的な社会的スキルのトレーニングを行う。しかし、そこで教師が子どもの気持ちや「ひきだす・高める」ことは必要ではない。それどころか、そうしてはならない。

出来のよい子は、教師の意図的・無意図的な誘導に反応し、教師の期待どおりの答えを発したりするが、そうした反応を発達や成長と誤解してはならない。「領域1」はあくまで次に続くお世話活動のための「下地づく

り」、例えていうなら「準備運動」であって「筋力トレーニング」ではない。

エンカウターのエキサイズとは似て非なるものである点には、特に注意してほしい。

子どもが変わるのは、「領域2」と呼ばれるお世話活動が最終的に終了するまでの間（少なくとも1年後）でよい。決してあわてる必要はないのである。ところが、治療的発想に立つ教師は、それが待てない。皮肉としか言えないが、彼らが依拠しているのはしばしばカウンセリングのはずなのに、短時間で子どもを変えたいと考えがちなのである。むしろ、治療が必要なのは、そうした発想から抜け出せない教師のほうといえるかもしれない。しかし、教師の意識が変わるにも、やはり時間がかかる。教師の成長・発達を促す意味においても、このような予防教育的な生徒指導実践は意味があるといえよう。

#### 参考文献

・滝充（2002a）、「日本のピア・サポート・プログラム」とスクールカウンセラー」臨床心理学2002年1月号、78～82ページ

・滝充（2002b）、「生徒指導の理念と方法を考えるー生徒指導モデルと事後治療的・予防治療的・予防教育的アプローチー」生徒指導学研究、創刊号、76～85ページ

・滝充／編著（2002）、「ピア・サポートではじめる学校づくり実践指導編」金子書房